

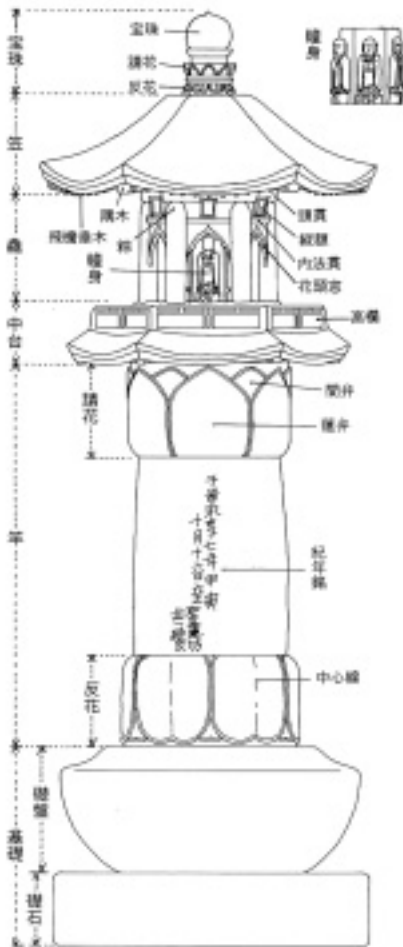
笛吹市探訪

笛吹市の石造物 六地藏石幢

今回は「六地藏石幢(ろくじぞうせきどう)」という少し変わったお地藏さんを紹介します。

人は死ぬと、生きている間に犯した罪によって地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人道・天道の六つの世界のいずれかにいきます。お地藏さんはそれぞれの世界で違った姿で現れ人々を救ってくれるので「六地藏」といわれ信仰されてきました。

六地藏石幢は石塔の一種で、図のように下から基礎(礎石・礎盤)・竿・中台(ちゅうだい)・龕(がん)・笠(がし)・笠・宝珠(ほうしゅ)という順に積み上げています。中台・龕・笠はいずれも平面六角形で、六角形のお堂をイメージして造られました。笠の屋根は軒が大きく反り、軒裏には隅木や垂



六地藏石幢の各部の名称

木といった天井を作っている木材が彫られています。龕(仏像を納める厨子という意味)は六本柱で六面に窓を持つ形になっています。龕の内部には六角形の石柱の各面にお地藏さんを浮き彫りにした幢身(どうしん)が納められていて、龕の六面の窓から拝むことができるようになっていました。

六地藏石幢は、山梨県の国中地方を中心に見つかっており、山梨独自の石造物といわれています。造られたのは室町時代の応永年間(1394~1428)から大永年間(1521~1528)頃の約100年間が中心で、この間の六地藏石幢が県内では230基以上確認されています。江戸時代の中ごろになって再び六地藏石幢



八代町竹居の「梅の木石幢」

が造られるようになりませんが、屋根の反りが無いなど室町時代のもとは形が大きく異なっています。

市内にも室町時代の六地藏石幢がいくつかあります。大部分は壊れ、江戸時代以降に修復されていますが、竿だけあるいは幢身だけになっても信仰の対象として大切にされているものもあります。

八代町竹居にある六地藏石幢(梅の木石幢)は、龕より上を失っていますが、高さ179センチのとても大きなものです。

一宮町末木にある「みそなめ地藏さん」は幢身だけが残ったもので、新しく造られた六地藏と一緒に一堂に祭られています。

一宮町南野呂にある六地藏石幢は、宝珠と笠・龕・中台が修復されていますが、地元ではこの石幢を「やく



一宮町末木の「みそなめ地藏」

地蔵さん」と呼んで今でもお祭りしています。このお地藏さんを拝むとよい学校に入ると言われています。

六地藏石幢は数多く造られたのではなく、当時の主な集落ごとに一基ずつ造立されたと考えられています。その一基が集落の人々を守るものとして現代まで大切に信仰されてきているのです。



一宮町南野呂の「やく地藏さん」